ザンジバル島にて（東アフリカ紀行②）

山下　久美子

旅の続きは、ザンジバル島です。　ダル・エス・サラームで一泊してから、ザンジバルへと旅は進んで行きます。国内線でザンジバル島へ飛びました。飛行時間は、２０分です。ここは、クリスマスで、空港にはツリーが飾られ、サンタクロースもいましたよ。なんと往路は、１２人ぐらいの小型プロペラ機で、Ｉさんは操縦席の隣に座ったのです。私は、その後ろに座ったのですが、パイロットの操縦が全部見れて面白かったです。

しばらくすると、青い海やサンゴ礁が見え、その向こうに緑いっぱいの島が見えてきました。島の面積は、千五百平方キロ。佐渡ヶ島の約２倍ほど。人口は、約三十八万人。細長い島です。

ダルから船も出ていて多くの居住者はこの船を利用している。ただ、どの船も故障が多く、欠航や乗り換えがあるらしくてこわいそうです。

ザンジバルという国は

１８３２年ごろ、アラブのオマーン帝国のスルタンは、宮廷をザンジバルに移し首都になり、ザンジバルタウンやクローブや奴隷貿易港として栄えたところです。しかし、１８９０年ごろに、奴隷貿易の反対運動が宣教師によっておこされ、ザンジバルがイギリスの保護領となるまで、スルタンの支配は続きました。その後革命がおこり、独立国となりましたが、現在、ザンジバルは、１９６４年にタンガニーカとザンジバルが合併して、タンザニア連合共和国となっています。

アフリカの中でも独特の歴史を持つアラブの影響の濃い島です。島には、アラブのスルタンの宮殿跡や奴隷貿易時代の旧跡が島全体に散在しています。世界遺産に登録されたストーン・タウンは島の西に突き出た半島にあり、当時のアラブの街並みそのもので、車も通れないような狭い道は巨大迷路です。

民族的にいえば、ザンジバルは、スワヒリと呼ばれるアラブとアフリカンの混じった人が多く、タンザニア本土は、１２０を超える民族が集まって形成されている多民族国家です。(地球の歩き方より)

栄華の夢の跡

ストーンタウンを歩きました。迷路のような道の両端は、民家や商店が立ち並び「ジャンボ」（こんにちわ）と気安く声をかけてくれて、ダルとはちがう雰囲気を感じました。西洋人も多く観光化している感じがしたからでしょうか。

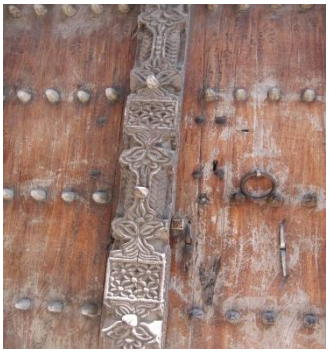
オールド・アラブ砦

オマーン・アラブにより、１７世紀末にポルトガル軍の攻撃に備えて建造された。要塞は、ポルトガル教会やポルトガル人の住居があった場所に建てられましたが。要塞は１７５４年にアラブ（？）の攻撃を受け破壊され、現在は、四方の壁と玄関や銃眼を設けた塔が残っています。現在内部は、スタジアムやレストランとして使われていました。

驚嘆の家

１８８３年スルタンが建てた宮殿で、ザンジバルでは一番大きな建物です。スルタンは、１９１１年までここに住んでいたそうです。

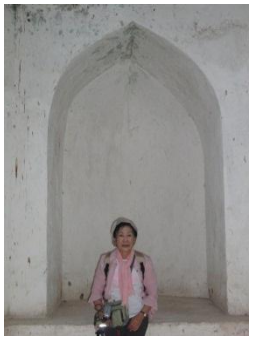
現在は博物館になっていますが、修復中で、中をみることができませんでした。少しのぞいてみると、本物のダウ船が置かれていました。中が壊れかけていて、残念でした。建物はサンゴ石のしっくいでぬりかためられた真っ白い立派なものです。ストーンタウンの家並みには、美しい彫刻が施されたアラブドアがならん



でいます。がっしりした観音開きの扉には、木の葉や花をあしらった幾何学模様の見事な彫刻が見られておもしろかったです。

スルタンのハーレム

　マルフビ・パレスというりっぱな宮殿跡地です。かなり廃墟化していますが、バルコニーを支えていた石柱やドーム型のペルシャ式浴室やプールが原型をとどめています。また、側室が待たされたという部屋もきれいでした。



からゆきさんの家とジャパニーズバー跡

　行ってみたかった所です。現在民家となって、人が住んでいて、外からしか見れません。一番下は、土産物屋になっていました。

　日本人として初めてザンジバルをおとずれた(１８９４年)「からゆきさん」の住んでいた家と営んでいたジャパニーズバーがありました。現在は、土地の人の住居になっていますが、からゆきさんの時代は、船員がたくさんあつまり、大流行したバーだったそうです。ザンジバルにいたからゆきさんは最盛期で十数人を数え、５０年ほど前まで生活していたそうです。船で何か月もかかって、ザンジバルにやってきて、慣れない土地で望郷に浸る暇なく一生懸命働いたのでしょう。とても友好的で、ザンジバルの人たちに愛されていたそうです。

（つづく）

奴隷貿易

　イスラムの聖典コーランは、奴隷の所有を認めていて、ムスリムは、それを権利として行使してきました。奴隷は、イスラム法によって、女奴隷の子どもか異教徒(ユダヤ教徒やキリスト教徒を除く）の戦争捕虜と決められていました。その結果、奴隷は、異教徒の住む世界から供給されることになりました。それが、中央アジアであり、アフリカ大陸でした。奴隷は、アラブ人の奴隷商を介してバグダッドやカイロに連行され、イスラム世界に莫大な富をもたらせました。紅海とインド洋ルートを経て運ばれた人数は、総計三百三十万人。最盛期は、１９世紀のウスタアラブ時代。その最大の奴隷市場はザンジバル島にありました。

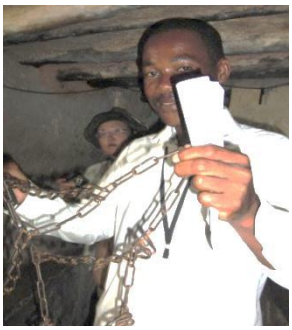
　アラブの奴隷商人は、東アフリカ全域より捕えられたアフリカ人をザンジバルへ運びこの場所に奴隷市場を造りました。アラブ人の栄華は、この奴隷商人の上に成り立っています。

　ザンジバルの中での奴隷数は１４万人で、人口の６７パーセントに相当したそうです。この奴隷は、クローブ農園で働かされました。クローブの開花寸前の蕾をひとつひとつ手で摘み取るのです。花が咲いてしまうと商品価値がさがるのでタイミングも重要となります。(和名で丁子といい薬用・スパイス・化粧品など利用価値は大きい)それを天日で乾燥させるそして製品を麻袋に入れて頭に載せ、港まで運び出荷するという重労働です。

　王宮の奴隷には、王女や王子に乗馬を教える奴隷や水汲みや屠殺を仕事とする奴隷・警備に従事したり・農業労働に従事する奴隷(王は、とても大きなグローブ園を持っていました)

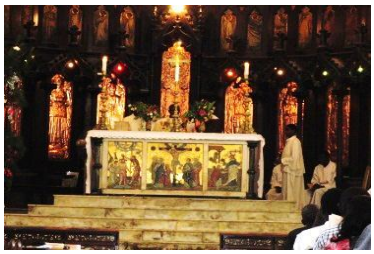
　売り場は４６ｍ×２７ｍの長方形で三方はヤシの葉、一方は石で囲まれていました。市は１６：００に開かれ、男の奴隷は土の上に女の奴隷は、離れたところに立たされました。

奴隷市場



上の写真は、連れられてきた奴隷が市に出されるまでに入れられたところで、コンクリートで仕切られとても狭くぎゅうぎゅう詰めにされたそうです。当時は天井はなく、汚物も波の引き潮に持って行ってもらうということでした。男女に分けられ１００以上の牢屋があった。繋がれていた鎖が残っていた。そして、市が開かれる１６：００

になると、隣にある売り場へと引っ張りだされました。この市場は今は大聖堂となっています。



　大聖堂の中は、クリスマスのミサが開かれていました。奴隷市場跡に悲しい歴史を塗り変えようとして１８７３～８０年にかけて、この教会がつくられました。キリスト教会堂スタイルとゴシック建築、アラブ風がミックスした様式で、建てられています。その教会横には、スウェーデン人の彫刻家が１９９８年に造った奴隷の像が歴史の証人のように立っていました。

奴隷の洞窟（マンガプアニ）

この洞窟は、ストーンタウンから少し離れていて、気が付きにくいところにありました。人に気づかれにくい所につくる必要があったのです。

１８７３年に奴隷の売買は禁止になり、市場は閉鎖されました。しかし、すぐになくなったのではなく隠れてアラブ商人は奴隷の売買をしていました。ここはそのとき奴隷が集められたところで、抜け道は、奥へとずうっと続いています。左の洞窟は３０年たってから見つかったものです。沖縄のガマを思い出しました。

香辛料産地

ザンジバルは香辛料もたくさん採れます。大きな香辛料市場へも連れていってもらった。

　一つ一つ葉っぱのにおいをかいだり、名前や効用も聞かせてもらったのですが、すぐに忘れてしまいました。

　歩いていると、子どもたちが寄ってきました。子どもは、どこの国の子でもかわいいです。

漁師の船。（漁業は大切な収入源・船の修理は丁寧にします。水がはいってこないよ

うにしよう「すきまにわたを埋めこんだり、仕上げの油を煮ていた

ストーンタウンの街の中は、真夏のようだ。歩いていると汗がだらだら出てきます。通りには、さとうきびを押しつぶしてさとうきびジュースを売っている人がいました。思わずみんなで一杯買って回し飲みしました。甘くておいしかったですよ。

公園の前の海では飛び込み競技していたり、ダウ船が走ったり、夕日がとてもきれいでした。

雑談

ホテルは当初子どもさんが参加するということだったので、安全第一で高級ホテルばかりだった。プールつき。海が目の前に開けて見えて素敵なところでした。

　ところが、時間がゆっくり流れすぎて、夕食はコースでしたが、１時間に一品しかでてこない。８時頃席について食べ終わったのは、１２時前。私は、眠りながら、食事をしていました。

島岡宅を訪ねて　Ｋさんが何度も連絡を取って下さって実現しました。私は、名前すら知らなかった。島岡強・由美子夫妻はザンジバルに１９８７年から住んでいて、もう２５年になるそうだ。夫の強さんは革命児と呼ぶらしい。家の表札にも書いてありびっくりした。由美子さんが二人の出会いと何故アフリカに住んでいるのか。「我が志アフリカにあり」の本に書かれています。Ｋさんが紹介しているのを私は知らなかったのですが、読んでいけばよかったと思いました。

　しかし、ご夫妻は、大変心優しく迎えてくださり、奥さんの手料理はとてもおいしかったです。さしみ、ナス料理、てんぷら、サラダおまけにタンザニア米のおにぎりもごちそうになりました。お二人は、アフリカの独立のために、仕事の場を与えたり、アフリカの製品の輸出や柔道を通して文化振興にも関わり幅広く活動しているかたです。

アルーシャ国立公園にてサファリ体験

サファリとは、スワヒリ語で、「旅行」という意味で植民地時代は動物をハンテイングする旅行を指していましたが、独立後はハンテイングを禁止。動物を自然のまま観察する旅行という意味を指しています。マナーは

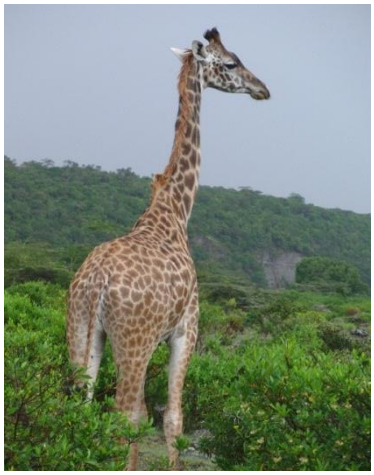
・車から降りない
・エサはやらない
・落ちているものなど持ち帰らない

ザンジバルに２日滞在後次の日は、楽しみにしていた、サファリ体験でした。大きな天井が上に開くジープみたいな車に４人づつ２台に分かれてスタートしました。このアルーシャのサファリは映画の「**ハタリ**」のロケ地だったというところで、有名なところです。私は、「ハタリ」は見ていないので、見てみたいと思いました。ケニアみたいなところではありませんが、大自然に触れることができてうれしかったです。鳥も多種類いるらしいが探すのが大変。飼っているわけではないので仕方がないですね。出会うことができませんでした。動物の写真も、あまり上手く撮れません。動物が遠すぎるのと動きが早いです。

でもその中で出会った動物を少し紹介します。

まず、**サル**はたくさんいました。
種類もいろいろです。
・アビシニアコロブス（尾が白く長い）写真上
・バブーン（写真下）
・サバンナモンキーなど

フラミンゴはすばらしかった。どこを見てもフラミンゴばかり。飛び立つ姿もきれいだった。



キリンは近くで見れました。顔もとってもかわいく、チャーミングだったよ。群れで一緒に行動していました。車が通ってもおかまいなし。ほんとに首が長かったです。

バッファロー

バッファローとシマウマが仲よく

アフリカクロトキ

途中でスコールに遭い、びっくりしました。ほんとうにすごい量の雨が突然降ってくるのです。動物たちには恵みの雨だろうと思いましたが。車の前が見えないくらいの激しい雨が降るのだが、２０分ぐらい降ると、さっとやみ、もとの草原の姿にもどります。ほっとしました。雨上がりの草原もなかなかいいものです。

キリマンジャロ

本当は、天気が良ければ、キリマンジャロの山が写真のように見れるはずだったのです。天気は曇っていて、今回の旅の楽しみの一つのキリマンジャロは、実際この目で見れず、心残りでした。帰りにポストカードを買って帰りました。